

# 性淘汰説を「ダーウィン美学」として読む

——カント美学と照らし合わせて——

五郎丸 仁美

## 序

ダーウィン第二の主著『人間の進化と性淘汰』(*The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*, 1871.)の第二部で扱われている「性淘汰説」<sup>1)</sup>は、第一の主著『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1859.)で披瀝された自然淘汰説に比べ、圧倒的に知名度が低い。性淘汰説は既に『種の起源』の中で言及されているにもかかわらず<sup>2)</sup>、この説も第二の主著も、その存在すら殆ど知られていない。ダーウィンの同時代人たちや20世紀のネオダーウィニズムは性差別的な理由で性淘汰説を拒否してきたし、またダーウィンの後継者たちは総じて性淘汰説を非科学的すぎると隠蔽し、自

- 
- 1) 筆者は日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183のグループ研究「ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討——ショーペンハウアーとの対比のなかで」の一環として、2019年8月25日龍谷大学にて「ダーウィニズムとニーチェ美学、カント『判断力批判』とダーウィン美学」という研究発表を行い、その準備の過程でダーウィンの性淘汰説について知ることとなった。発表では後期ニーチェ美学は自然淘汰説、性淘汰説のいずれも正確には継承しておらず擬似ダーウィニズムであると結論づけざるを得なかったが、筆者は性淘汰説への美学的関心を保持し続け、2022年2月25日オンラインで開催されたICUキリスト教と文化研究所主催の公開講演で、ダーウィンの性淘汰説をカント美学と照らし合わせつつ美学として読むことを試みた。本稿はこの講演を文字に起こし、加筆修正したものである。公開講演という性質上、専門的な議論をできるだけ避けたため、本稿が学術論文のレベルに達していないことをご容赦願いたい。
  - 2) 「自然淘汰」と題された第4章に既に「性淘汰」という節が設けられ、この概念が紹介された後も数回用いられている。Charles Darwin: *The Origin of Species, By Means of Natural Selection of the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*, Penguin, 2003, p.84-86, 149, 189./ダーウィン『種の起源(上)』渡辺政隆訳、光文社、2009年、165-168, 270, 331頁参照。

然淘汰に統合する試みを重ねてきたからだろう<sup>3)</sup>。

しかし『人間の進化と性淘汰』第二部は、自然淘汰説では説明できない生物界の現象、主に生存競争にとっては不利あるいは無意味に思えるような美的現象について詳細に語っており、美学的観点からして非常に興味深い。そもそもダーウィンは若い頃から美に深い関心を抱いており、既に1838年に「美は難題を解決する」<sup>4)</sup>と、後の性淘汰説を予言するかのような覚書を記していた。ところがニーチェを含め、哲学的美学はダーウィン進化論のこの美学的次元を軽視もしくは無視してきた。そこで本稿は、性淘汰説を「ダーウィン美学」として読み解き、関連性が顕著なカント美学と引き比べながらその独自性をも明らかにすることを目論む。最初に断っておかねばならないが、この試みには偉大なるパイオニアが存在する。今最も注目すべきドイツ人美学者にして「ダーウィン美学」の命名者、ヴィンフリート・メニングハウスである。筆者もその代表作『美の約束』(*Das Versprechen der Schönheit*, 2003.)によって性淘汰説の美学的解釈に導かれたのであり、メニングハウスこそ本稿の後見人だ。ただメニングハウスがダーウィンからネオダーウィニズムまで網羅しつつ「進化論美学」を打ち立て、科学的美学が哲学的美学を補強し深化させようという主張に軸足を置いているのに対し、本稿は、性淘汰説の科学としての是非は問わず、美学的仮説として受け容れ、ここから今日の美学及び哲学、文化的状況に対する問題提起を抽出することを最終的な着地点とする。同時に、本

- 
- 3) Winfried Menninghaus: *Aesthetics after Darwin, The Multiple Origins and Functions of the Arts*, translated by Alexandra Berlina, Academic Studies Press, 2019, p.X, 14./ ヴィンフリート・メニングハウス『ダーウィン以後の美学 芸術の起源と機能の複合性』伊藤秀一訳、法政大学出版局、2020年、9、39頁参照。筆者が先に読んだ邦訳はこの英語抄訳版を底本としており、ドイツ語版 *Wozu Kunst? Ästhetik nach Darwin*, Suhrkamp, 2011. との間に大きなずれがあるため、本稿では英訳本で参照箇所を示す。
- 4) Charles Darwin: *M Notebook*, In: H. E. Gruber: *Darwin on Man: A Psychological Study of Scientific Creativity, together with Darwin's early and unpublished notebooks*, transcribed and annotated by Paul H. Barrett, Wildwood House, 1974, p.272-3.

稿はダーウィン性淘汰説及びメニングハウスによる新たな美学の地平を啓蒙すること自体をも意図している。

## 1. ダーウィンの性淘汰説

### 1. 自然淘汰と性淘汰

では性淘汰説とはいかなる説か、自然淘汰説との対比によって明らかにすることから始める。自然淘汰説とは、個体の死と生存を直接的に決定づける生存競争に関する説であり、一般に「ダーウィニズム」と呼ばれる。一方、性淘汰説は、美的な嗜好による配偶者の選択と二つの性を持つ生物の身体的な性差、すなわち二形性やその装飾的な部分の発達に関する説で、美的な選択、いわば美的判断がそうした有性生物の進化を決定づけているとする。この美的嗜好は繁殖の成功を左右する。ダーウィンの説明を引用しておく。

「性淘汰は、ある個体が繁殖に関して同性の他の個体よりも成功することによって生じるが、自然淘汰は、両性のあらゆる年齢の個体が、一般的な生活条件に対してどれだけ成功するかによって生じる。性的な闘争には二つの種類がある。一つは同性の個体間で、競争者を追い出したり殺したりする闘争であり、大抵は雄どうしの間で闘われる。これに関して、雌は受動的にとどまっている。もう一方の闘いは、これも同性の個体間で闘われるものだが、異性、たいていは雌を興奮させたり魅了したりするための闘争である。ここでは雌は、もはや受動的にとどまっておらず、よりよい配偶相手を積極的に選ぶ」<sup>5)</sup>。

---

5) Charles Darwin: *The Works of Charles Darwin, vol.22, The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex, Part II*, edited by Paul H. Barrett/ R. B. Freeman, New York University Press, 1989, p.639./ チャールズ・ダーウィン『人間の進化と性淘汰 II』長谷川真理子訳、文一総合出版、2000年、457頁。以下ダーウィンの引用は全てこの著作からの引用となるので、書名を省略する。

性淘汰と自然淘汰の差異を語っているのは前半だけのように見えるが、後半の二つの「性的な闘争」も各々ダーウィンが区別した二つの淘汰に属す。配偶機会を巡る第一の闘争は、一方の性、多くの場合は雄の個体がもつ文字通りの力、あるいは強さによってのみ決するため、自然淘汰に属し、第二の闘争は、異性にアピールする性的な魅力が問題となり、多くの場合は雌がより美しい雄を選択することで決するがゆえに性淘汰なのだ。一方の性の美的な形質や求愛行動におけるパフォーマンス能力が他方の性によって選ばれることが性淘汰の本質なのである。

自然淘汰が環境への適応に有利な形質や能力を進化させる一方、性淘汰は美的な進化を促す。性的な差異を示す身体のある方、とりわけ、顕著な性差を示す二次的性徴の装飾や一方の性のパフォーマンス（歌やダンス）能力は、何世代にも渡る異性による美的な選好の蓄積として現れてくる。異性の美的な好みにより一定の傾向性があるならば、選ばれる側の性の身体装飾はそれに即してより美しく、性的アピールの実演はより洗練されていくことになる。また、選ぶ側の性も、より高い美的魅力を具えた配偶者を選んでおけば、より美しく配偶機会に恵まれる子供をもうけることができ、結果的に多くの子孫を残せるというわけである。

## 2. 典型的性淘汰における雄の美的装飾と実演

典型的性淘汰は、ダーウィンが最も美的な動物と考えていた鳥類のように、雄が美的な身体装飾を誇り、雌は大抵雄よりも地味だが配偶行動における美的選択の権利を有し、両者が一夫多妻制で結ばれている種に見られる。そこでは、最高の装飾をもつ雄が最大の配偶機会を得る（現代の通俗的表現で言えば「一番のイケメンが一番モテる」）。一夫多妻制であるから、美しい雄には次々に子供ができ、その子供もまた配偶者に困ることのない美しく魅力的な雄となり、その血は栄える。逆に、あまり美しくない雄は配偶者を十分に得られないか全く得られずに生涯を終え、その血が途絶えかねない。装飾のもつ魅力度に応じて配偶者と子孫繁栄の機会が得ら

れるという、この単純で残酷なルッキズムの法則によってこそ、雄の身体は美的に進化する。

この際、ダーウィンが特に注目するのは、美しい装飾が身体を鈍重にして逃げ足を遅くしたり、あるいは派手すぎて敵にとっての視認性を高めたりと、生存競争において不利にはたらく事例があることだ。自然淘汰説からは逸脱している、かかる雄の身体の形質を説明することはダーウィンの「難題」であったが、これを「美は解決する」。自然界においても美は死の危険を伴うものなのだ<sup>6)</sup>。ダーウィンが性淘汰説を展開するに当たって、最初に挙げた例を紹介しよう。「ある種の有蹄類」すなわち鹿などの「雄の角」の形態は、所謂ランナウェイ（暴走的）進化を遂げて「極限にまで押し進められ」、「ふつうの生活条件の範囲においては、雄にとって多少なりとも害があるに違いないと思われる」。大きくて複雑に枝分かれした雄鹿の角が雌の鹿にとって魅力的だからであろうが、武器としては枝分かれしていない一本の真っ直ぐな角の方が有効なはずで、二頭の雄鹿が戦いの際に絡み合って離れられなくなってしまうことすらある。それゆえ、このケースから「雌への求愛において勝ち残り、たくさんの子を残すことになる雄が持つ有利さは、長い目で見ると、外的な環境に対して完璧な適応をすることによって得られる利益よりもむしろ大きいのだということがわかる」。性淘汰説はこのような「闘いで他の雄に勝つことよりも雌を惹きつける力を持つことの方が重要である」事例を示す学術論文や雑誌、そればかりか私的な手簡や対話から引かれた大量の証言によって構築されていく。そしてダーウィン自身「このことは今まで誰も予想しなかったことである」と付け加え、生物界において美しさが強さよりも価値を持ちうるこ

---

6) メニングハウスはこの事実を『美の約束』という著書の通奏低音としているがゆえに、「『美しさのために』 - アドニス の 栄光 と 悲 惨 」（“Wegen der Schönheit”: Glanz und Elend des Adonis）をその第1章に据えた。Winfried Menninghaus: *Das Versprechen der Schönheit*, Suhrkamp, 2003, S.68/ ヴィンフリート・メニングハウス『美の約束』伊藤秀一訳、現代思潮新社、2013年、83頁も参照のこと。

との不可思議さを認めている<sup>7)</sup>。

鳥類の雄の美といえばクジャクの羽の艶やかな美しさが代表的だが、セイランという鳥の雄はその対極とも言うべきシックでハイセンスな羽を持つ。ダーウィンがこの羽を他の人々に見せたところ、多くの人が「自然の作品というよりは芸術作品であると感激した」そうだ。しかもそれは「最も洗練された美が雌を魅了するためにあり、それ以外の何ものでもないということを示す絶好の証拠を提供している」。せっかくの絶妙な色合いと模様を出し惜しみするかのように、「雄が求愛の姿勢をとるとき以外、初列風切は広げられず、窪みにはまったボールの装飾は、それ以外には完全な姿を見せられることはない」からだ<sup>8)</sup>。セイランの雄の羽には特筆すべき性質がもう一つある。その「次列風切」は「手に負えないほどの大きさになって」その「飛行能力をほとんど完全に奪ってしまう」というのだ。「これによって捕食性の鳥に襲われやすくなるというのは、ほとんど間違いないことだろう」。セイランの雄の羽も性淘汰説でなければ説明できないランナウェイ進化を遂げているのだ。ここでダーウィンは他の「多くの雄たちの鮮やかな色彩さえ、彼らを、あらゆる種類の敵の目につかりやすくさせているだろう」、「これまで述べたような事実から、雄の羽やその他の装飾は、雄にとって最も重要なものであることがわかる」とし、最初に掲げた命題を簡潔に繰り返す。「ときには美しさの方が、闘いに勝つことよりも重要である」と<sup>9)</sup>。

鳥類の雄による求愛行動の歌やダンス、配偶目的の場所づくりなどの瞳目すべき現象は、今や性淘汰説を聞いたことのない人々にも認知されている。鳥類の雄は求愛行動のパフォーマンスに用いる羽根の手入れなどに余念がないし、その実演を観る雌は、求愛者の美的センス、ダンスや歌や建

---

7) 「ある種の有蹄類」以下ここまで Darwin, p.235, 531f./ 31, 341 頁以下。

8) ebd. p.414./218 頁

9) ebd. p.417, 418./ p.221, 222 頁

築の腕前を評価する。例えば、博物学者ウォレス氏の証言によれば、フウチョウという鳥の場合、複数の「十分に羽を生やした雄が木に集まって」「ダンスパーティーを開く」。そこで「空中を飛び、羽を広げ、美しい羽を立て、それをふるわせる」様は「木全体がはためく羽で満たされているように見える」。これらの鳥たちは「羽をときどき広げて調べ、どんなごみでもいちいち取り除き、非常な注意を払って羽をきれいに保っていた」<sup>10)</sup>という。こうした求愛行動の実演は人間の音楽・舞踏・エンターテインメントと類比的であり、そのための身体の手入れは人間の美容・ファッションと連続的に捉えられうる。またラムゼイ氏によれば、フウチョウモドキなる鳥は、「背の低いあずまやを、5、6種に属するカタツムリの殻と」「青、赤、黒などのさまざまな色の木の実で飾る」うえ、そこに「新しく摘んできた葉、ピンク色がかった若い茎なども飾られ、全体は正真正銘の美的センスを表している」という。これは巣ではなくて雌を招き入れるための「集合場所」、いわばデートスポットなのだが、グールド氏も「これまでに発見された鳥による構築物のなかでも、最も素晴らしいもの」だと太鼓判を推したそうだ<sup>11)</sup>。こうした構築物の創造は人間の技芸、芸術作品の制作と重なる。メンシングハウスによれば、ダーウィンは以上のような実演や制作が人間の芸術の起源であり、求愛を示すものが身体外部の対象に拡大し、配偶行動への限定から解放されるときに人間独自の芸術になると考えていたという<sup>12)</sup>。

### 3. 典型的性淘汰における（鳥類などの）雌の美的選好

かかる鳥類などの雄の美的装飾、求愛行動における歌やダンスの実演及

---

10) ebd. p.410/ 215頁。本稿は科学的学術論文ではなく、直接原著に当たることもできなかつたため、ダーウィンが引用している文献についての註は省かせて頂く。

11) ebd. p.429/ 234頁

12) Menninghaus (2003), S.72f., 223/ 88, 264頁参照。

びデートスポットや巣という作品に対峙するのは雌たちだ。そして雌の鳥は人間と同じように雄の尾羽の美しさを賛美し、また人間が人為的淘汰により「自分の好みの基準にしたがって雄の家禽に美を与えていくことができるのと同様」「長い間にわたって」「より魅力的な雄を選ぶことによって、彼らの美を付け加えてきた」という。ダーウィンも「こう考えるためには、雌の側に区別する能力と好みがあると仮定せねばならず、一見したところそんなことはほとんどありえないように思われるだろう」<sup>13)</sup>と、自然界に美的判断を想定する仮説が受け入れ難いものだと十分承知している。しかし「理性が低いことは」「美に対する趣味があることと十分に両立する」<sup>14)</sup>。

理性と結びついていると思われがちな美的判断力が人間に固有のものではないということ以上に衝撃的なのは、典型的性淘汰における雌の美的嗜好が雄の身体の美的進化を規定している点だが、この大きな問題は次節で取り上げる。雌の美的嗜好に関しては、美学的に着目すべき点が他にも多々あり、メニングハウスが精力的に解説しているので、まずそれらを挙げておく。第一に、雌の美的嗜好は多様であるが、その傾向性はある程度共有されており、しかも遺伝する。雌の好みが種・地域・ある特定の集団ごとに統一され、一定期間持続するからこそ、雄の身体の装飾がある特定の美しさを完成させていく。雌の嗜好が恣意的なもの、つまり気まぐれから発していて可変的であることは、人間のファッションの原則とパラレルであり、これが多様性に拍車をかけている。「性淘汰は、好みといったような変動しやすい要素によって支配されているので、なぜ同じ分類群に属する、生活の習性もほとんど同じであるような鳥類の間に」「真っ白な種類、ほとんど白い種類、真っ黒な種類、ほとんど黒い種類が混在するのか

---

13) Darwin, p.219./ 15頁

14) ebd. p.425./ 230頁、メニングハウスは、美しさは「高い理性や道徳性よりも『理性の低さ』と結びついて表れる」と先鋭化している。Menninghaus (2003), S.128f./ 155頁



が理解できる」<sup>15)</sup>とダーウィンは言う。それでも、今やそのような色彩の明確な分類と各々の統一性が見られるということは、特定の集団内での美的判断に関する普遍的な合意が暫くの間は持続していたことの証である。

第二に、雌の美的嗜好はやはり人間に固有とされてきた価値づけという契機を含む。この価値は、美的装飾の持ち主たる雄にとっては生殖の成功という優位性と、評価する雌自身にとっては配偶者選びの成功という優位性と直結しており、両者に子孫繁栄という喜ばしい結果を与える。これが有性生物界における「美の約束」なのである。

だが、雄は本能にしたがって求愛しているだけであり、自分の美しさによって子孫を繁栄させようという目的をその都度持っているわけではない。ダーウィンによれば、グールド氏は「シロエンビハチドリ of 奇妙な羽衣」についての報告に「さまざまな装飾や変異が、それ自体で目的であることを、私は少しも疑っていない」<sup>16)</sup>と付け加えていたという。一方の雌の側も、その都度無意識により美しい、より好ましい方を選択しているだけであって、いつか完璧に美しい雄を出現させようなどと意図してはいない。例えば「クジャクの祖先の多くの雌は、先祖代々長く長く続く間、この一段と優れた美を評価してきたに違いない。なぜなら、彼女らは、無意識のうちにも最も美しい雄を選び続けることにより、クジャクの雄を、最も美しい鳥に仕立て上げたからである」<sup>17)</sup>。セイランの雄の羽の芸術的な美も意識的に創造されたわけではないことは、奇抜な比喻によって説明されている。セイランの雄の羽の精妙な目玉模様が出現したのは、「ラファエロの描くマドンナ像の一つが、何人もの若い画家たちによって偶然に塗られた絵の具のなかから一つずつを選択することによってできあがったものであって、その中の誰もが、そもそも人間の姿を描こうなどとは思ってい

---

15) ebd. p.514./ 323頁、Menninghaus (2003), S.75f./ 93頁参照。

16) Darwin, p.459./ 265頁

17) ebd. p.449./ 256頁

なかったというようなものである」<sup>18)</sup>。性淘汰は言うまでもなく性的関心を前提としており、雄も雌もこの関心にしたがって美的装飾を誇示したり、それを見て興奮したりするのであるが、それはあくまで本能的、無意識的なものであって、彼ら／彼女らに子孫繁栄に対する目的意識はない。この意味における無目的性が第三の注目すべき点であるが、それは雌の美的選好ばかりでなく雄の美的装飾にも当てはまる<sup>19)</sup>。

#### 4. 美的身体の進化

次に、典型的性淘汰における雌の心的な選択が雄の美的装飾に物理的な変化をもたらすという先ほどの論題を含め、性淘汰によって生物の身体が進化する仕組みに注視する。大前提として、一般的な性淘汰による美的身体の進化を支えているのは遺伝という現象だ。性淘汰による美的進化が起こるのは有性生物に限られているが、この進化のためには、異性によって魅力的なものとして選ばれ配偶機会を高めた性的二形性、すなわち雌雄いずれかの身体の美的な形質が遺伝し、継承されていかなければならない。遺伝という要素は自然淘汰においても重要な役割を担っていたが、ダーウィンの時代、遺伝はまだ大いなる謎であり、この謎を追っていくならば、科学的問題に踏み込みすぎ、本稿の主旨からは逸れることになる。

美学的関心を引くのは、魅力的な身体の形質が遺伝するだけであるなら進化は起こらず一定の形質に固定されたままであるはずであるのに、例えば雄の鳥の身体の装飾が長い年月の間に変化し、複雑化、多様化していく理由である。このためには、集団ごとに普遍的合意が存在する雌の美的選

---

18) ebd. p.450./257頁

19) Menninghaus (2003), S.70f./ 87頁参照。メニングハウスは雄の美的装飾の無目的性について、ダーウィンの理論では、目的に適った自然淘汰と目的を欠いた性淘汰が併存することで、合目的性と無目的性のパラドクスが解消されると解釈している。

好にも、ときに気まぐれな好みの変化、多様化への傾向性があらねばならない。ダーウィンは得意とする人間のモードとの類比を用いて、目新しいもの、変化そのものを好む雌の性質をこう推測する。「雌の鳥は、われわれが流行を追うのと同じように、単なる新奇性を好んだり、変化のための変化を好んだりすることがあるようだ」。ここで挿入されるアーガイル侯爵の言葉はさらに意義深い。「私はますます、多様性、単なる多様性が、自然の大きな目的であると認めねばならないと思うようになった」<sup>20)</sup>。ここで取り上げられるのは、アフリカクロサギとその祖先型の色彩の変化だ。それらは最初暗い色調だったが、次に純白になり、三番目として「さらなる流行の変化によって」、現在のスレート色、赤、金褐色などの色合いが生じたと考えられるが、この例は最初の説の証明になる。「このような連続的な変化は、鳥が新奇性のために新奇性を好むという原理以外では理解しようがない」<sup>21)</sup>。雄の身体に新しい色味が生じるのは変異という偶然だが、これに飛びつく雌の嗜好には新奇性を好む本能が備わっており、それが多様性を生み出すというわけである。

美的身体の進化論において最も目を引くのはやはり、一方の性の美的嗜好が、他方の性の身体的な美的装飾を実際に「創り出す」ことだろう。典型的性淘汰において先ほど確認された雌の目新しさを好む傾向性からして、僅かな雄の身体にのみ見出される新規の変異が選ばれることによって、この「作品の創作」は増強される。この仮説を認めるということは、物質的な身体の変化に対する精神的もしくは心的な美的嗜好の支配力、部分的優位を承認することにほかならない。これこそダーウィン性淘汰説が非科学的とされてきた主たる要因である。だがダーウィン自身はこれを大いなる発見と見なしている節があり、「性淘汰の原理を認める人は、大脳

---

20) Darwin, p.514./ 324 頁、Menninghaus (2003), S.78f./ 95 頁以下も参照のこと。メニングハウスは『ダーウィン以後の美学』では「ランダムな多様性」を強調している。Menninghaus (2019), p.3./ 18 頁参照。

21) ebd. p.515./ 325 頁

システムが現在のからだの機能のほとんどを制御しているばかりでなく、さまざまなからだの構造といくつかの心的形質の進歩と発達に、間接的な影響を及ぼしているのだという、注目すべき結論に導かれるはずである」<sup>22)</sup>と宣言している。ここはその真偽を問う場ではないが、この問題が美学的にも「注目すべき」であることは間違いない。

##### 5. 性淘汰の一般的パターン、性淘汰と自然淘汰の補完的作用と協働

さてここで、人間の性淘汰による進化の理論に移る前に、性淘汰の一般的パターンについて纏めておく。人間が、美的な意味においても、いかに特殊な進化を遂げてきたかを際立たせるためだ。ダーウィンによれば、典型的性淘汰による美的進化が顕著な鳥類などでなくとも、有性生物の一般的配偶行動において、雄は能動的であり、相手を特に選ばずに発情し、美しい。つまり雄は雌を追いかけて求愛するもので、雌をめぐる武力闘争で破れることもあり、また美的装飾やパフォーマンスによる平和な争いでも、配偶者を獲得できずに生殖に失敗する確率が高い。そしてこの繁殖行動の成功度の差が美的な進化を促す。性淘汰の一般的パターンでは、雄において、美と能動的な競争行動とが結びついている。他方、雌は受動的で地味で目立たないが、求愛される側であるから、生殖機会について心配する必要がなく、選り好みをし、最も自分を興奮させる魅力的な雄を選択して美的淘汰を行う。一般的性淘汰では、雄とは対照的に、雌においては美しくないこと、攻撃的でないことが繁殖行動における選択権と結びついている<sup>23)</sup>。

ここで明らかになるのは、実際の配偶行動においては、最初に引用したダーウィンによる二つの性的な闘争区別、すなわち力によって決する闘いと美を巡る争い、自然淘汰に属するものと性淘汰に属するものが混在して

---

22) ebd. p.642./460頁、Menninghaus (2003), S.82, 219./101, 260頁も参照のこと。

23) Darwin, p.229f./26頁以下、Menninghaus (2003), S.96f./117頁以下参照。

おり、どちらによって勝者が決まるかは流動的で定かでない、という問題だ。雄の側に美しさと攻撃性が備わっているのだから、当然そう考えざるを得ない。性淘汰と自然淘汰はどのような関係にあるのか。

この点に関するダーウィンの説明はいささか曖昧であるが、要約すれば、美が力に、あるいは力が美に統合され得ない限りにおいて、性淘汰と自然淘汰は互いに還元不可能だが、双方向的に移行することができ、同時に作用しうるともいう。例えば雌が、美しいが力はなく闘争に敗れた雄（「ダメなイケメン」とでも言おうか）を選択する場合、子供の養育や生存機会の安定性を欠くこととなり、雌自身にとって有害になりうる。せっかく美しい子供を産んだとしても無事に育たないかもしれない。そうした場合、雌は自然淘汰のルートへと移行し、次は美しくはないが強い勝者を選択しうる。とはいえ、ダーウィンが再三再四強調するところによれば、美が力よりも優先されることもある。雌をめぐる武力闘争では勝利し恋敵を倒した雄でも、ターゲットである雌の美的嗜好に合わなければ、少なくともこのケースでは生殖機会を失う。最初の「難題」に戻ることになるが、そのようなことが起こらない限り、生存競争において有害な美的装飾など現われ得ない、というのがダーウィンのロジックだ。だが、もちろん大抵の雌は魅力的で且つ闘争にも強い雄、「マッチョなイケメン」を選択しようとするだろう<sup>24)</sup>。そこでは性淘汰と自然淘汰が同時に作用することになるわけである。

## 6. 人間の美的進化と配偶行動

ダーウィン性淘汰説による人間の美的進化論は、社会学的な問題も孕んでおり、美学的観点に絞ることが難しいのだが、まずもって目を引くのは、人間に固有の美的もしくは性的な装飾は体毛に関わっており、とりわけ体毛のない剥き出しの肌こそ、最初の衣服、メニングハウスの端的な表

---

24) Darwin, p.640./ 458頁以下、Menninghaus (2003), S.85f./ 104頁以下参照。

現を借りれば「最初のファッション現象」だとする説である<sup>25)</sup>。

そもそも「体毛がなくなったことは不都合であり」、熱帯でも急に寒さに襲われることがあるから、「おそらく危険だったに違いない」。ウォレス氏の指摘の通り、「世界中どこの住人も、裸の背中や肩に何らかのおおいをかけて保護することを好む。皮膚が露出することに何か直接的な利益があると考える人は誰もいないだろうから、体毛がなくなったことが自然淘汰によるとはとうてい考えられない」。そして「世界中のどこでも、女性の方が男性よりも体毛が少ないので、体毛のないことは、ある程度第二次性徴であるといえる」。それゆえに「これは性淘汰を通して獲得された形質であると十分に考えられるだろう」<sup>26)</sup>。ダーウィンはこのように結論づけた。

また男性のひげは典型的な性淘汰と同様、人間にも女性が美的選択権を有していた時代があったことの証明だという。「下等動物ではずっと普通に見られる」一般的性淘汰のパターンでは、雌に選択権があり、「彼女らを最も興奮させたり魅了したりする雄だけを受け入れる」が、「人間の祖先ではそれがはたらいていたと考えてよい理由がある」。それが「男性が、ひげやその他いくつかの形質を持っていること」であり、これに対しては「人間の祖先がそのような過程を経て装飾としてそれを獲得してきた

---

25) Menninghaus (2003), S.90f./ 109 頁以下参照。メニングハウスはパークやゲートを引用しつつ、一般に人間が猿を醜いと思うのは体毛がないことに美しさを見出しているからであり、一世代前のファッションは反媚薬だというベンヤミンの解釈とも合致すると指摘している。『ダーウィン以後の美学』では、寄生虫から肌を守ると言う説が的外れとされ、ダーウィンが援護される。人間の体毛は猿では露出している性的で厄介な場所にのみ残され、全く寄生虫対策になっていないからだ。体毛が失われた結果、服を着るようになった人間においては、性的身体のもっとも刺激的な部分が隠された秘密となり、想像界へと移行した、というフロイトの解釈も詳しく紹介され、裸の肌と人間に固有な性的ふるまいとの関係が明らかにされる。Menninghaus (2019), p.19, 29./ 48, 66 頁参照。

26) Darwin, p.624f./ 439 頁

というのが、最もあり得そうな説明である」<sup>27)</sup>とされる。

人間にも一般的性淘汰が行われた時代があったと見るダーウィンは、人間の技芸ないし芸術をも鳥類の求愛ダンスや歌の延長上にあるものと捉え、とりわけ音楽に対して刺激的考察を加えている<sup>28)</sup>。ダーウィンにとって音楽は、ここまで終始主題となってきた美というよりは、崇高という美学的カテゴリーに属す。というのも音楽は、「恐怖や怒り」ではなく、「優しさや愛」「献身」、一方で「勝利や戦争の栄光のような感情もかき立てる」が、「これらの力強い、さまざまに入り交じった感情は、崇高な感覚を呼び起こす」と言明されているからだ。これに続いて、音楽は「われわれ自身が考えもつかなかったような、眠っていた感情、われわれもその意味を理解していない感情を呼び起こす。または、リヒターが言うように、われわれが見たこともなく、見ることもないだろうようなものについて教えてくれる」というハーバード・スペンサーの言葉が引かれ<sup>29)</sup>、音楽のかかる特殊な作用という美学的問題に解決のヒントが与えられる。「音楽に関するこれらすべての事実は、音楽的調べやリズムは、半人間状態にあった頃の人間の祖先が、それを、全ての動物たちが最も強い情熱で興奮する求愛の季節に使っていたと考えるならば、ある程度は理解できるようになるかもしれない」<sup>30)</sup>。続けてダーウィンは、「人間の祖先の男性、女性、または両性が、音節化した言語によってたがいの愛を表現する力を獲得す

---

27) ebd. p.622./ 436頁

28) Menninghaus (2003), S.223./ 264頁以下参照。ここでメニングハウスは、ダーウィンにとって人間の美的技芸は動物の求愛の歌・ダンスにおける自己能力のディスプレイの変形版だと解釈しているだけだが、『ダーウィン以後の美学』では、人間の芸術には共同体の結束や個人の自己形成をもたらす作用があるとし、動物的求愛に由来するにせよ、美的感覚の洗練、遊戯性、道具やシンボル言語の使用によって拡張されていったという議論を展開している。Menninghaus (2019), p.78, 97, 117./ 158, 192, 229頁他参照。

29) Herbert Spencer: *On the Origin and Function of Music*, in: *Essays on Education and Kindred Subjects*, Amazon, printed in Japan, ISBN 9798721181559, 2021, p.319.

30) 「恐怖や怒り」以下、Darwin, p.594, 595./ 406, 407頁

る前に、既に音楽的調べやリズムによって互いを魅了していたということは、あながちあり得ないことではないだろう」<sup>31)</sup>と音楽と性的なものとをはっきりと結びつけている。この箇所は「崇高な感覚」のみならず、音楽と言語の連関、芸術と性的なものなど、美学的・哲学的思索を触発するテーマで満ちており、『人間の進化と性淘汰』の一年後に出版されたニーチェ『悲劇の誕生』(Friedrich Nietzsche: *Die Geburt der Tragödie*, 1872.)におけるディオニュソス論との共鳴も見逃せない。この箇所は、音楽芸術を創り出すディオニュソス的衝動の原初性及びこの衝動と性的なものとの連関を証言しているからである。

性淘汰説における人間の美的進化という点で最後に踏まえておくべきは、求愛の歌を歌う「半人間」が、その後、特殊な配偶行動を取るようになったというダーウィンの想定だ。それは一般的パターンにおける両性の役割が入れ替わり、人間においては女性が美しくなり男性が選ぶ側になった、という単純なものではない。ダーウィンは、フンボルトの旅行記(A. von Humboldt: *Forschungsreise in die Tropen Amerika*, 1807-)などに助けられながら一夫多妻制において美的選択がなされている「未開人」を考察する。彼らは「自分たちの個人的外見に多大な注意を」払い、「装飾品に目がない」。アフリカには「刺青」する部族、皮膚に「傷をつけ、そこに塩を擦り込むことによって肉を盛り上がらせる」という身体装飾をする部族が見出される。彼らは「髪の毛には特別な注意を払っており、長く伸ばして地面につくまでするところもあれば」「櫛でまとめるところもある」。彼らはまた、我々と同様、「顔の美しさを主に愛でる」のだが、その顔は一部が切り取られたり、その特定の場所に穴が開けられたりと過激な装飾が施されている。そしてこうした美的装飾をより多く施しているのは、女性ではなく男性なのだ。ダーウィンが再現しているマカロロ族の酋長とベイカー卿との対話は、この部族に「女性美」という概念がなく、男性のひ

---

31) ebd. p.595./407頁



げが美的装飾の中心をなすことを伝えている。この部族は女性の「上唇に穴を開け、そこにペレレと呼ばれる大きな金属と竹でできた輪をはめこむ」ので、バイカー卿がその理由を尋ねると、酋長は「もちろん、美しいからだ！ あれは女性が持っている美しさの唯一のものだ。男性にはひげがあるが、女性にはない。ペレレがなければ、女性はどうなってしまうだろうか」と答えたという<sup>32)</sup>。このほかダーウィンは、ウィンウッド・リード氏の友人の一人が「誰もがたいへんに美しいことで有名な」ジョロフ族に「男性だけでなく女性もみな」美しいのはなぜかと尋ねたところ、「醜い奴隷を選んで彼らを売ってしまうのが、われわれの長い間の習慣だからです」という答が返ってきた話も紹介している<sup>33)</sup>。

ダーウィンは「未開人」についての報告からして、原初の人類において、男性は自分の美しさを磨くことに熱心になると同時に、女性を支配し、女性から配偶行為における選択権をも奪い取ったと推測する。身体的に女性に勝り、より美しい男性が配偶者を選択もするということは、メンディングハウスの言葉を借りれば、ダーウィンにとって「性淘汰説の前代未聞の脱線」「論理的矛盾」であり、人間の女性が「動物界のどこの種よりも力を失った」こと、「鳥類から野蛮な退化」を遂げたことを意味する<sup>34)</sup>。

しかし、「文明人」の女性に美しさが求められてきたことは否定すべくもないので、女性は少ない配偶機会に対処する武器として装飾を身に纏うようになり、次第に美しさを手にしていったはずだ。ダーウィンはこのプロセスを殆ど語らない。「男性は女性よりも肉体的にも精神的にも強く、原始的な状態では、どんな動物の雄がするよりも卑しい奴隷状態で、女性を自分の手元にとどめておいた。それゆえ、男性が選択の力を身に付けたとしても驚くべきことではないだろう。女性は、世界中どこでも、自分の

---

32) 「未開人」(邦訳本のこの呼称を括弧付きでそのまま用いる)の部族の美的習慣に関する引用は、Darwin, p.597f./408頁以下参照。

33) ebd. p.611./424頁以下、強調は筆者による。

34) Menninghaus (2003), S.110f./132頁以下

美しさの価値を意識しており、その手段があるところでは、男性よりもずっと自分の身をあらゆるたぐいの装飾で飾るのを喜びとしている<sup>35)</sup>。それどころか、「未開人」も「よく思われているように、結婚に関してまったくみじめな状況に置かれているわけではない」、「彼女らは、自分の好む男性を誘惑し、結婚する前でも後でも、相手が嫌いならば拒否することができる<sup>36)</sup>と、配偶者の選択権も紙面上では即座に一部女性に与え返される。議論の歯切れが悪いが、ダーウィンによれば、こうして人間においては両性が美的魅力を発達させ、美しさによって選り選ばれ、子供の養育は共同責任になるという方向へ変化していった。一夫一妻制になると、性淘汰の影響は薄れ、たとえ美しい女性を妻にしても子孫を長期に渡って残せる保証はなくなる。「文明人」は自然淘汰による進化と並んで性淘汰による美的進化も凍結された状態に入るものの、メニングハウスが指摘している通り、ファッション・美容・化粧・果ては脱毛・増毛・整形手術まで、人工的には美的に擬似進化し続けている。しかし、この節で見えてきた事柄から明らかなように、そうした美の追求は、「思っている以上に過去の自然史に根ざしている<sup>37)</sup>のである。

## II. ダーウィン美学とカント『判断力批判』

### 1. ダーウィン性淘汰説と哲学的美学

以上、ダーウィン『人間の進化と性淘汰』という大著の第二部において美学的関心を引くと思われる要所を抽出してきたが、この性淘汰説とカント美学の連続性及び非連続性を見極めることが本稿の次の課題とな

---

35) Darwin, p.621./ 436頁。メニングハウスは、女性による美の領域への侵略により、美しさが身体的な弱さと結びつくという有性生物の世界では珍しい現象が生じたことに着目している。Menninghaus (2003), S.111, 132./ 134, 160頁参照。本稿註6参照。

36) Darwin, p.623./ 438頁。

37) Menninghaus (2003), S.123, 126f./ 149, 154頁参照。

る。最初にダーウィンに実際に影響を与えたことが確実な18世紀哲学的美学の書を紹介する。それはエドマンド・バーク『崇高と美の観念の起源』(Edmund Burke: *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757.)である。

ダーウィンの初期の美に関するノートにはこの書からの引用が多数抜き書きされており、ダーウィンが実際にこの書を読んだことは明らかだ。バークはダーウィン美学を先取りするかのよう、人間の美的選好に生殖への関心が作用していることを「我々が愛と名づけるこの混合せる情念の対象は、性のもつ美に他ならない」という表現で簡潔に断言していた<sup>38)</sup>。さらに興味深いのは、バークが性淘汰説の典型例でありダーウィンの長年の美的関心の核でもあったクジャクを例にとり、「私はこれまでに一度も孔雀が空を飛ぶのを見たことはない」が「空を飛ぶ他の鳥の最も美しい様々の品種よりも際立たせている非常な美しさに感銘を受けた」とし、つまり適合性は美の原因ではない、と結論づけている点だ<sup>39)</sup>。したがって性淘汰説を導き出したダーウィンの根本的な問題意識は、バークによってヒントを与えられたか、もしくはアイデアを増強されたかもしれないと考えられる。メニングハウスが「ダーウィンは明らかに哲学的美学から学んでいる。今や哲学的美学がダーウィンから学ぶ時が来た」と高らかに宣言するのも無理はない<sup>40)</sup>。

『崇高と美の観念の起源』に感銘し、大いに影響されたとされる哲学者がカントその人である。これから扱うことだが、ダーウィンはカント美学を念頭に置きながら性淘汰説を展開したのではないかと思われるほど、両者の美学は符合する点が多い。しかし残念ながら、ダーウィンが

---

38) Edmund Burke: *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, Sofia, 2022, p.41./ E・バーク『崇高と美の観念の起源』中野好之訳、みすず書房、1999年、47頁

39) ebd. p.90./ 115頁

40) Menninghaus (2003), S.79, 220./ 98, 262頁以下参照。

『判断力批判』を読んだことを証明するものは今のところ発見されていない<sup>41)</sup>。むしろジャン・パウルの『美学入門』(Johann Paul Friedrich Richter: *Vorschule der Ästhetik nebst einigen Vorlesungen in Lipzig über die Parteien der Zeit*, 1804.)の方がダーウィンにとって身近な書物だった。先ほどのスペンサーの音楽論に登場した「リヒター」とは、ジャン・パウルのことを指し、『人間の進化と性淘汰』第二部では地の文にもこの名が散見される。確かにダーウィンは——カントを直接読んだことがないにせよ——近代美学を学んでいたのである。

## 2. カント『判断力批判』について

ダーウィン性淘汰説の美学的側面とカント美学を照らし合わせる前に、その第一部がカント美学の集大成に当たる『判断力批判』(Immanuel Kant: *Kritik der Urteils kraft*, 1790.) について概説しておく<sup>42)</sup>。この書はカント批判哲学体系の完結編に当たる。『純粹理性批判』によって明らかにされたのは認識対象である感性的世界の因果的必然性であったが、『実践理性批判』はこれに対して超感性的世界に属する人間の自由の想定の下に展開された。この自由と必然とを媒介し、体系上の問題を解決することが『判断力批判』の至上命題だった。しかし『判断力批判』第一部の美的判断力批判は古典主義美学の金字塔として、美学史上またドイツ文化史上、独立した価値を有し、ゲーテ、シラーら古典主義者のみならずロマン主義にまで影響を与えた。とりわけシラーは美学者としてはカントの

41) 筆者も日本語で読める最も詳しいダーウィン伝にあたり、カントとの関係が多少なりとも言及されていないか全編読んでみたが、驚くべきことに性淘汰説関連の記述が一行もなくバークすら登場しなかった。この事実は『人間の進化と性淘汰』が無いものとされてきたことを雄弁に物語っていると思われる。A・デズモンド/J・ムーア『ダーウィン 世界を変えたナチュラルリストの生涯 I, II』渡辺政隆訳、工作舎、1999年

42) 以下のカント美学の概説は拙著『遊戯の誕生 カント、シラー美学から初期ニーチェへ』国際基督教大学比較文化出版会、2004年、第1部第2章「カント美学における構想力と悟性の戯れ」を纏めたものである。

「弟子」であり、『人間の美的教育』（Friedrich Schiller: *Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen*, 1795.）の中で、この書の美学的議論はカントの諸原理に基づいていると告白している<sup>43)</sup>。

カントはこの書において美的な趣味判断と目的論的判断を扱っており、両者は反省的判断力と呼ばれる。これは悟性の法則による概念化では規定しきれない自然の多様性を統一するために、自らを起源とする普遍的原理のうちに特殊なものを包摂する能力であり、その原理は自然の合目的性である。カントはこの第一部において、客観的美ではなく主観の美的経験に定位する。ある客観の表象によって、無関心にこれを見る主観の認識能力に、目的として意図したわけではないのに自発的に自由な諧和、すなわち構想力と悟性の戯れがもたらされて快が惹起されるような場合、この客観は「美しい」と判断される。目的なき合目的性の形式に基づく快を述語としてある客観に付加する（総合判断をする）この趣味判断は、主観的であるにもかかわらず、アプリオリに普遍妥当性を要請しうるといふ。この問題の解決のために導入されるのが、認識能力の自由な調和状態の共有性を示す「共通感官」という理念だ。カントの考察の中心は自然美にあり、芸術美も芸術家の天才を媒介として自然が創造するものであるとされる。一方、美的判断の後には、自然は我々の認識能力の戯れを惹き起こし生命感情を促進するために創造された芸術作品のようだという感嘆、恩恵の念が生じる。かくして美しい客観とこれを見る主観と同様、自然全体と人間も調和しう。これは美的な和解にとどまらない。かかる結果をもたらす芸術作品としての自然美の目的は、我々自身の最終目的である道徳的使命に求められるほかに、また美的判断力は、主観の内と外なる「自由の根拠」という「超感性的なもの」に連関づけられているとされ、そこで自由

---

43) Friedrich Schiller: *Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen*, in: *Werke in drei Bänden*, Herbert G. Göpfert (Hg.), Carl Hanser, Bd 2, 1966, S.445/ シラー『美的教育』浜田正秀訳、玉川大学出版部、1982年、131頁参照。

と必然、理論的能力と実践的能力が結合して統一されると結論づけられるからだ。また美的判断における構想力と悟性の諧和と、道徳的判断において意志の自由が理性法則にしたがって自己自身と調和することとの類比から、美は道徳的な善の象徴であるという最も有名な命題も導出される。

### 3. カント美学とダーウィン美学の連続面

以上のカント美学の基礎知識を携え、第一部で抽出したダーウィン性淘汰説における美学的考察と照らし合わせていく。まず「目的なき合目的性」という美的判断の性質についてだが、カントによれば、美しい客観を見ると凶らずも主観の認識能力が一致して自発的に戯れ、それによって主観は快を覚え、この際の客観は美的判断力にとって合目的であると見なされる。構想力はあくまで自由だが悟性の法則性に自ずと従っており、それは「法則なき合法則性」とも呼ばれ、この際、両能力は相互に活性化しており、よって美しい客観は「生の促進の感情」を直接的に帯び、自然美の経験において人間は世界に歓迎されているという「適合感」を得ることができる<sup>44)</sup>。他方、ダーウィンの典型的な性淘汰において、雄の美しい身体装飾や求愛の歌やダンスの実演を見ると、雌は興奮させられ、繁殖機会を得るが、そこにはその都度美的な判断が下されており、子育ての成功や子

---

44) Immanuel Kant: *Kritik der Urteilskraft*, in: *Werke in zehn Bänden*, Wilhelm Weischedel (Hg.), Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Bd 8, 1983, S.264f., 325, 381, 398f., 457/ 理想社版カント全集第8巻『判断力批判』原 祐訳、理想社、1988年、53頁以下、123, 188, 208, 276頁参照。適合感については、Georg Kohler: *Geschmackurteil und ästhetische Erfahrung, Beiträge zur Auslegung von Kants "Kritik der ästhetischen Urteilskraft"*, de Gruyter, 1980, S.254f. 参照。メニングハウスも自然美のこの「肯定的効果」を「世界の認知的『順応』体験」と呼んでいる。メニングハウス『美の約束』261頁以下参照。この書物は最初にイタリア語で書かれ、邦訳はそれを底本としているため、その後で公刊されたドイツ語のSuhrkamp版との間に若干の差異がある。当該箇所はSuhrkamp版では削除されている。なおメニングハウスもカントとダーウィンの美学の連関について、この書の第5章“Sexuelle Wahl und philosophische Ästhetik”を当てている。邦訳(イタリア語版訳)では「ダーウィンとカントにおける美的『判断』」だった。

孫の繁栄といった目的意識はなく、美的な嗜好とそれにしたがう選択があるだけだ。しかし美的判断をする主観たる雌にとって、その対象となる客観である雄は、繁殖活動において間違いなく合目的であり、たんに適合していると考えられるばかりでなく、両者は実際につながりになる。雄の側も求愛行動によって必ず生殖に成功するという保証があるわけではないが、それでも美しい雄が雌に受け入れられて子が産まれるならば、逐語的な意味で生の活性化を果たし、有性生物界の原則に適った結果を得る。さらにそこに生まれる子供は父親と同様に生殖機会に恵まれるため、子孫を多く残してゆくことができ、長期的に見れば、両性ともに自然界に適合したことになるだろう。以上の点において、ダーウィンの性淘汰説は、カントが人間の美的判断について原理的に論じた理論を、身体性・即物性・直接性をもって敷衍しているかのように見えないだろうか。

次に普遍的な美の理想もしくは客観的な美的判断基準の不在と間主観的普遍性に移る。カントは『判断力批判』のなかで普遍的な美の理想を客観的に定式化することは不可能であるが、美的判断は普遍的に伝達可能であり、間主観的な普遍性を有していると説き、この問題が美的判断力批判を牽引していく問いとなった。一般的には人間の美的な趣味には個人差があり多様であると認識されているが、カントは芸術美よりも自然美に焦点を合わせることで、この一般論からの疑義をまずは回避する。例えば虹を見て美しくないと思う者はほとんどいないだろうから。また、実は美的趣味が本当に個々人で異なっているとしたら、名画や名曲と呼ばれるものの存在も流行という現象も説明できないだろう。カントは、美的経験における認識能力の戯れが「認識一般にふさわしい主観的關係」であるがゆえに「あらゆる人々にとって妥当し、したがって普遍的に伝達されえなければならぬ」とし、「私たちの諸認識能力の自由な戯れから生ずる結果」としての「共通感官」を想定することで、上記の主張を証明してみせる<sup>45)</sup>。

---

45) Kant, S.295f., 321./ 89, 118頁以下。メニングハウスは共通感官論を（生殖活動

ダーウィンはカントのこの主張を継承し、典型的性淘汰における雌の美的選好にこれを見出し、いわば例証する。但し、ダーウィンは雄の身体装飾やパフォーマンスに対する何かしらのセンサーのようなもの、つまり「共通感官」が雌に備わっているとは考えない。むしろ人間における流行という現象と平行に、雌が総じて新奇性を好む傾向性を持つがゆえにその都度美的な趣味が共有化されること、そして何と言ってもそれが遺伝し、引き継がれうるという仮説を持ち出したのだった。

第三に、カントとダーウィンの美学は美の自律という点でも連続性が見られる。プラトン以来、西洋哲学では美と善を重ね合わせ、美を道徳的領域に引き寄せて思考する伝統があり、美善合一説（カロカガティア）が主張されてきた<sup>46)</sup>。カント美学では美が善の象徴とされるが、ここで美と善は合一でもなく隣接してもいない。カント美学は、そもそも認識の領域と道徳の領域、即ち必然的因果法則に従う機械的な自然と人間の自由が属すと想定された超感性的世界とを媒介することを第一義的な目的として論じられたのだから、美の問題は最初から二つの領域から独立していなければならなかった。美的判断は、知的関心も道徳的関心もない無関心の状態でなければ成立せず、自然美に対しては認識能力が本来の業務である認識を行わずに戯れるのであり、自然美は人間の道徳的使命を喚起する力を持つが超感性的な世界には属さない。ダーウィン美学もまた、身体を鈍重にしあるいは敵からの視認性を高める形質が生物界に存在する理由を自然淘汰が及ぶ範囲から切り離し、美の問題として考察することで開始された。美的性淘汰という現象は、自然淘汰とときに協働するが、互いに全く異なったベクトルによって作用している。美の自律あるいは美的自律という主題

---

ではなく）社会的結束をもたらすという人間の芸術（特に音楽）に固有な性質を結びつけている。Menninghaus (2019), p.80./162頁

46) メニングハウスは些か強引にダーウィン性淘汰説にもカロカガティアを当てはめている。筆者も一旦は説得され、公開講演でも紹介したが、後に違和感を抱くようになった。Menninghaus (2003), S.70./86頁参照。



は、カント以降の近代美学の一大テーマとなっていくが、カントとダーウィンの美学は美の自律を議論の端緒として前提している点で共通している。ダーウィンの名もこの主題を論じた美学者たちの系譜のうちに刻まれて然るべきなのではないか。

以上の三点以外にも、カントとダーウィンの美学が共有しているキーワードは少なくない。その一つが極めて今日的でもある多様性だ。多様性の統一という主題もまた近代美学の主要テーマであり<sup>47)</sup>、この点でダーウィン美学の保証人に取り立ててカントを持ち出す必然性はない。だが、両者において多様性と美的判断との関係がちょうど対照的になっている点に興味深いのだ。というのも、カントは「自然の形式はきわめて多様であり」「自然における特殊なものから普遍的なものへと上昇すべき責務をもっている反省的判断力は」「多様なものを統一する一つの原理」を必要とするとし<sup>48)</sup>、自然の合目的性という原理に基づいて自然の多様性の統一を目指すべく、美的判断力を論じたのに対し、ダーウィンは自然の多様性のうち、少なくとも有性生物の装飾の多様さについては、異性による美的判断がその要因であり、特定の時期・特定の集団においては普遍的な美的趣味の合意があったとしても、変異の登場によってこの趣味が更新され、あるいは枝分かれすることによって、有性生物の一方の性の身体にかくも多様な装飾が生まれたと考えたからである。ダーウィンの仮説は、多様性と美的判断の連関において、ちょうどカントの思考を逆転させ、それに応答しているような形をとっている。

最後に「芸術作品としての自然」というキーワードを取り上げる。カントは「自然がその美しい諸産物で、たんに偶然によってではなく、いわば意図的に、合法則的な構図にしたがって、芸術としての、また目的なき合目的性としての姿を示す、そうした自然の讃嘆」を人間の道徳的使命と関

---

47) Menninghaus (2019), p.15./ 40, 41頁参照。

48) Kant, S.252./ 39頁

連づけ<sup>49)</sup>、自由の領域への足掛かりに用いた。カントよりも美学的・文学的・形而上学的にこのテーマを突き詰めた例も多く、その最たるものが初期ニーチェの根源=一者を救済する芸術作品としての世界という美的形而上学だろう。一方ダーウィンが語る生物界の美の具体例の多くは、意図的でも合法的な構図にしたがってもないが、あたかも芸術作品のように見えるものであり、そこにダーウィンの美学的関心と讃嘆が垣間見えていた。『人間の進化と性淘汰』第二部は、芸術作品としての自然美のカタログのようなものではないか。さらにダーウィンは芸術作品のような美的装飾という枠組みを超え、配偶目的の巣作りやデートスポットの準備など、性的アピールが身体から外部へと移行する場合、文字通り生物による芸術作品の原型が作られているとし、ダンスや歌による求愛行動をも人間の芸術的パフォーマンス、とりわけ音楽の起源として捉え、このテーマに人間による芸術作品との関連性を加えたと考えられる。

#### 4. カント美学とダーウィン美学の断絶面

カント美学とダーウィン美学の断絶面として最初に挙げるべき美の位置づけは、ダーウィンからカント及び近代美学全般への異議とも読める。それどころか、動物に美的判断力を認めるダーウィン美学は、美的なものは人間の特権的領域であるという西洋哲学史を貫く伝統的主張への痛烈な批判とさえ言える。カントは「快適さは理性のない動物にも通用し、美は、人間にだけ、言いかえれば、動物的ではあるが、それでも理性的な存在者にだけ通用する」<sup>50)</sup>と述べる一方、美的経験において人間の「心はおのれの状態の感情においてそうした全能力を意識する」<sup>51)</sup>とも語る。カントにとって美とは人間にのみ享受されうるものであると同時に、人間の全能力

---

49) Kant, S.398f./208頁

50) Kant, S.287./79頁

51) ebd. S.280./70頁

を發揮させる特別な位置を占めていた。ここから、美的経験は理性的衝動と感性的衝動の相互作用たる遊戯衝動によるとし、この美的遊戯を戯れるところでのみ人間は完全である<sup>52)</sup>、としたシラーの主張まではほんの一跨ぎだ。それだけ美的判断力が人間に独自の高度な能力と見なされていたわけだが、ダーウィン美学は有性生物の一方の性は異性の美しさに魅了され、最も美しい異性を選択する判断力を持つとし、この根本的な人間中心主義美学を覆す<sup>53)</sup>。メンシングハウスの言葉を借りれば、人間の美的判断力には自然史、あるいは先史があったのである<sup>54)</sup>。

次に、ダーウィン美学はカント特有の美的判断の無関心性、善の象徴たる美の純粹さに疑義を挟む。先ほど指摘した通り、カントによれば、美的判断は無関心でなければならず、知的関心や道徳的関心が紛れ込むことですら破綻し、ましてや性的欲望などの対象への生々しい関心は美的経験を完全に阻害する。この潔癖なるカント美学に対し、ダーウィンにとっての美的判断は性的関心と分かち難く結びついており、パートナー選択の際に行われるもの、いわば生殖活動の一環だ<sup>55)</sup>。両者のこの大きな差異は、人間の美的経験も、かつては、また今もその根幹においては、道徳的なものよりもむしろ性的なものに結びついていた／いるのかもしれない、という疑念を呼び起こす破壊力を有している。

カント美学とダーウィン美学の第三の断絶面は、第一部でも強調した通

---

52) Schiller, S.481./ 187頁参照。

53) メンシングハウスは「美しさへの嗜好は高度に発達した文明の贅沢ではなく」「むしろ自然の進化の中心」であり、現代は「原始時代へと孤を描いて戻る」と述べている。Menninghaus (2003), S.129, 136./ 156, 165頁以下、ほかS.218./ 259頁も参照のこと。

54) 本稿註37参照。趣味を高次の能力とし、そこに人間の優位性を見出す人間学的美学については、Menninghaus (2003), S.216./ 257頁参照。

55) メンシングハウスは、「クジャクの雌がより壮麗な雄の装飾を愛好するのは、カントのモデルが要求するように、直接的で概念なき敵意による」とし、性淘汰における美的判断はカント美学に合致していると見做すが、やはりカントは性的関心を帯びた選好を美的判断とは認めないと思われる。Menninghaus (2019), p.7./ 26頁参照。

り、科学の常識さえ打ち破る。つまり、カントの美的判断力がたんに主観の快を反省するだけの主観内部の出来事に留まるのに対し、ダーウィン美学では、美的判断が主観の快を超えて美的判断の対象である客観の美しさの発生や進化に作用するのだ。性淘汰説においては、雌のより美しいものを選ぶ美的な判断が、カントの言葉で言えば（メニングハウスが好んで使用しているのだが）、「構成的」なものなのである<sup>56)</sup>。この非科学的と忌避されてきた大胆な説は、美学的仮説として見れば、心揺さぶる壮大なロマンを有してはいないだろうか。

最後に、カントのみならず西洋の美学的思考の全歴史との決定的な差異として、ダーウィン美学では崇高さについて語るができない、という点を挙げておく<sup>57)</sup>。美と崇高は美学の二大カテゴリーとして長く継承されてきており、ダーウィンが参照したバークの書のほぼ半分も崇高論が占めている。だがダーウィンの性淘汰説において「崇高」という言葉が登場するのは既に引用した箇所のみであり、それも人間が音楽を聴くときの感情を形容していた。というのも、崇高は力学的・物理的・心理的に圧倒的なものを指すのであって、このカテゴリーは、ダーウィンの理論では最初に引いた二つ性的闘争のうち自然淘汰に属するため、性淘汰説に基づくダーウィン美学は原理的に崇高さを語れないのだ。ダーウィンによれば、鳥の雌は自分を巡って闘い合う雄の鳥たちの勇猛さに美的な興奮を覚えない。このことはダーウィン美学と西洋美学全般との決定的な断続面であり、人間の美的感覚と動物のそれとの非連続性、逆に言えば人間の美的経験の固有性を示していると言えよう。

---

56) Menninghaus (2003), S.219./ 260頁、(2019), p.10./ 32頁参照。「遂行的」と言う場合もある。ebd. S.82./ 101頁参照。

57) この問題を考察する契機となったのは、キリスト教と文化研究所所長魯恩碩氏の公開講演での質問、「旧約聖書では主に崇高さが語られているがダーウィン美学では崇高をどのように捉えているのか」という問いだった。この場を借りて感謝の意をお伝えしたい。

### 結びにかえて——問題提起

以上、ダーウィンの性淘汰説を美学と捉え、カントとの連関によって、これを近代美学史のなかに位置づけつつ、そこから逸脱するその特性をも探ってきたが、本稿のこの試みは何らかの明確な結論を導くような性質のものではない。とはいえ、ダーウィン美学は今日の哲学的美学、哲学及び科学全般、そして我々の文化的状況に対して重大な問題を提起しており、最後にそれを指摘しておくことは意義深いと思われる。そこで結びに代えて三つの問題提起を行い、本稿の試みを締め括ることとしたい。

まず、先ほど指摘した通り、性淘汰説は近代美学の人間中心主義に対する異議として読める。有性生物の一方の性に審美眼を認めたダーウィンからすれば、美的なものを理性、倫理性の関わりの中なかで人間に固有なものとして考察することは、一種の視野狭窄であろう。とはいえ、美というものを動物的なものに還元すれば良いという話でもない。人間には美に対する理性的関心があり、だからこそ美学が成立するのであり、また倫理性と絡み合った人間固有の美的感覚の文化的遺伝子が存在することも否定できず、それらは必ずしも美の自律を妨げない。今後は、美が有する動物的・本能的・性的な次元を切り捨てることなく、他方で人間固有の美的経験の次元をも探究することが求められるのではないか。その際、ダーウィン美学の可及範囲にない崇高さというカテゴリーの代表的芸術、ギリシア悲劇を、本能的なものに近いディオニュソス的なものと理性や倫理性を包摂するアポロ的なものの相互作用によって解明した初期ニーチェの美学が鍵になる可能性があり、これは筆者の新たな課題と受け止めたい。また、当然のことながら、人間には想像力（カントでは「構想力」）という能力があり、それが美的経験に大きく作用していること、そもそも芸術作品の創造と享受においては動物の巣作りや求愛行動のパフォーマンスから人間が遥かに進化していることも急いで付け加えておかねばなるまい<sup>58)</sup>。

---

58) 本稿 註28参照。

次に、哲学及び科学全般に対する問題提起として、ダーウィン美学には、長い年月を経れば、性淘汰によって心の動き、主観的判断が身体の形質、客観的な存在に影響を与えうる、あたかも芸術作品であるかのような形態を生み出しうる、という仮説が含まれていた。従来の哲学はこれを無視するというより知ることすら殆どなく、従来の科学はこれを隠蔽することに腐心してきた。なるほどダーウィン美学は、自然美として動物の装飾よりも一般的な植物、とりわけ花の美しさについて何ら説明することができない。だから科学的に信用ならない、というのも理解できる。しかし、少なくとも、まるで性淘汰説など語られなかったかのような科学の側の態度は改めるべきであり、哲学は美学的仮説として真摯に受け止め、議論していくべきではなからうか。

というのも、ダーウィン美学からは、今日の文化的状況に対する警告を汲み取ることができるからだ。現代ほど綺麗なもの・可愛いもの・写真映えが良いものなど美的なものが溢れ返り、ルッキズムを含めた感性中心主義が支配的だった時代はない。我々は、雄鳥の羽の絶妙な色合いや精巧な模様を、「まるで人間が作った芸術作品のようだ」と驚嘆するが、鳥が我々に似ているわけではない。本稿では、鳥類の典型的性淘汰における雌の美的判断を何度か男性に対する現代の通俗的表現へと言い換えてきたが、それらの表現は今や当然のように流通しており、その発信元は主に女性だ。ダーウィン美学に則るなら、我々人間の方が鳥に似てきているのである。総じて今日の人間の美的洗練は、決して文化の高級化、万人の貴族化などではなく、極論すれば、美しくないものを排除しようとする「未開人」への先祖返り、動物化、退化なのではなからうか。この異様な状況に対する気づきを与え、歯止めをかける可能性をダーウィン美学に期待したい。

## 要旨

本稿は、進化論美学者メニングハウスに導かれつつ、ダーウィン『人間の進化と性淘汰』性淘汰説を美学的仮説として解釈する試みである。

性淘汰説によれば、有性生物の二次的性徴として主に雄に現れる装飾は異性の美的配偶者選択によって進化した。生存競争において装飾は不利になりうるが、それは勝利より美が優先されうる証だ。両性とも目的意識はないが、魅力的な雄が配偶機会に恵まれその装飾が遺伝すれば、両者に子孫繁栄が約束されるからだ。雌の好みは集団ごとに統一性があり遺伝するため雄が特定の美に近づくが、新奇性への傾向によって装飾は多様化する。一方人間の性淘汰は特殊であり、男性の髭は第二次的性徴であるから、かつて女性に美的選択権があったと考えられるが、後に男性が美を占有したまま女性を支配しその選択権まで奪った。今や女性が美の領域を侵略し、性淘汰による進化も凍結したが、化粧や脱毛など人為的進化は続いている。かかる美の追求は自然史に根ざす。

かかるダーウィン美学はカント美学理論を敷衍しているようだ。カントによれば、美しい客観を見ると、意図していないのに主観の認識能力が戯れ快を覚えるため、美しい客観は生の促進の感情を齎し自然美によって人間は世界との適合感を得る。ダーウィンの性淘汰でも、美的判断をする雌は本能に従うだけだが、対象の雄は雌にとって合目的であり、番となり子孫に恵まれるなら両性ともに逐語的な意味で生の活性化を果たし長期的には自然界に適合する。ダーウィン美学はカントが要請した美的判断の間主観の普遍性も例証する。カント美学には感性的領域と超感性的世界を媒介する使命があるため美の自律が前提されているが、ダーウィンの美も最初から自然淘汰から自律している。またカントが自然の多様性を対処すべく美的判断力を導入したのに対し、ダーウィンは有性生物の美は美的判断によって多様化したとし、対照関係も見られる。しかしダーウィン美学は美を人間の特権とするカントの人間中心主義を覆し、美は理性や道徳性よりむしろ性的なもの結びつくという疑念を呼び起こす。

だからこそダーウィン美学は、美の性的次元を切り捨てずに人間固有の美的経験の次元を探究する方向性を近代美学に示し、性淘汰説を軽視してきた科学・哲学全般に異議を申し立て、今日の感性中心主義に対して、美的洗練は文化の高級化ではなく、先祖返り・退化なのだという警告を与えてくれる。